

七月のテーマ

社員のおかげ

万人の 下僕しもべ

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九）のことは掲載しません。



え・城谷俊也

人が、人の主人あるじになろうとつとめるとき、みずからその生活をきゆうくつにし、醜悪な欲望のとりことなる。が、人が人の下僕しもべになろうとするときは、おのずからその生活をゆたかにし、その精神を気高くする。

自分は社長である。店主である。だから多勢の人を使っている。使っている以上は、自分は主人である。彼らは雇われており、自分の使用人なのだという考え方があ

る。はたしてそうであろうか。その人は、人を雇うことによつて、人から雇われているのではあるまいか。人を使うことによつて、使っている人から逆に使われているのではあるまいか。

社長は社員によって、その重責ある仕事をさせられているのであるから、社長が主人であり、みんなを使っているのだといってしま

うと、それは半面の真理にしかすぎない。逆に社員が主人である、との面もあることを忘れてはならない。主人的になり、高くとまつてい

ると自分の面目をたもとうとして、ますます気をつかうようになる。人の下になるまいとして、その内心は、実のところ、きゆうきゆうとしているのである。

これに反して万人のしもべたらんとする生活は、自己のつまらぬ面目や保身にかかわるところがないので、じつに心がひろびろとし、ゆたかな生活が、くりひろげられるのである。

さて、このような「しもべ」になるためには、さしあたって、どのようなことから実行していったらよいであろうか。

そのためには、まず第一に、呼ばれたときには「ハイ」と返事をして、行動にうつすことである。主人のようにそっくりかえっているのではない。目下の者から呼ばれても、おなじことである。

第二に、できるだけ、にこやかに心で人に接することである。ムリな笑顔は不自然である。しかし、いずれにせよ、心の中はおだやかで、なごやかでありたい。すくなくとも人に接するときは、そうし

た心にあることを自覚しているということがたいせつである。

そして第三に、よろこんで働く。すなわちその人の下にある心をもつて、その人のために進んでつくすという喜びの精神である。サービスをしても、いやいやながらや

ったのでは意義がなくなってしまう。世話をするならば、喜んで進んでするのである。

ある外交員は、人の家を訪問したとき、はきものが乱れていると、きちんとそろえて、出てくるそうである。それも、「こうしてあげたら、自分の商売に有利になるだろう」といったようなささしい根性からではなくて、まごころから行うのである。はじめのうちは誤解するむきもあつたが、しだいにその誠意が認められるようになって、自然に信頼を高めたのであつた。

「しもべとならん」の実行は、日常生活のいたるところにあるのである。その実行は、若々しく、かつ気高く、ゆたかなすばらしい生活の眼をひらいてくれる。

（月刊『新世』1963年11月号）